

平成 29 年度 第 2 回屋久島世界自然遺産・国立公園における山岳部利用のあり方検討会
議事録

日時：平成 29 年 8 月 20 日（日） 9:30～12:30

場所：屋久島離島開発総合センター 第 1 会議室

■ 検討会開催の挨拶

九州地方環境事務所 加藤国立公園課課長：日曜日の午前中ということでお集まりいただき、ありがとうございます。先生方と関係者の皆さまには、木曜日（8/17）から屋久島に入らせていただき、金土（8/18～8/19）と花山歩道から永田、宮之浦、淀川登山口まで現地視察を行い、私も同行させていただいた。第 1 回検討会での議論をして今日は第 2 回検討会ということで、屋久島の山岳部の利用をめぐる色々な課題のかなりの部分の実態を見ることができたのではないかなと私自身の実感も含めて感じている。今日はこれから現地視察で見たことも踏まえて、第 1 回検討会で出た色々な論点の洗い出しや、今後どのようにそれをビジョンとしてまとめていくのかということにつながる議論をいただくことになるかと思う。

ここには関係行政機関、屋久島の場合は森林管理局、鹿児島県、屋久島町、環境省の行政 4 者と、それから屋久島の利用に関わる皆様がいらっしゃるが、様々な方のこれまでの努力、協力、そしてこれからどうしていきたいかということを含めて、屋久島のあり方を考えていくという大事な検討会と思っており、忌憚のないご意見をいただきたい。

土屋 座長：木曜日（8/17）から木曜日から屋久島に入り、金土（8/18～8/19）と現地視察をした。この結果についてはこの後に少し時間をとって報告する。やはり現場に入るということは非常に重要なことで、色々な問題点や屋久島の魅力を改めて認識できたというのは非常に大きかったと思う。私自身、屋久島の山に何回か登ったことはあるが、ここまで過酷なのは初めてで、まずは生きて帰って来ることができるか非常に不安だったが、無事にもどることができて良かったと個人的には思っている。今日は前回に引き続き、今年度の議論の中心的なところを、時間をかけてじっくり検討することになる。今日はお休みの上に地元ではお祭りの日で非常にタイミングがよくないときにも関わらずお集まりいただいた。少なめの人数ではあるが、その分じっくり議論できるかと思う。

■ 現地視察の結果概要について

◇ 資料 1 について

【資料説明】

事務局 日本森林技術協会(高橋)：本年中に 3 箇所での現地視察を予定しており、1 箇所目として、利用の少ない登山道から比較的利用のある登山道（花山歩道～宮之浦ルート）を視察した。その視察ルートと立ち寄り箇所について説明。

土屋 座長：現地視察に参加した関係者から、意見や感想を簡単に紹介したいと思う。

まず、私からの感想として一つ目は、屋久島の自然、景観、レクリエーション、登山体験そういうもの

のすばらしさ、奥深さを改めて認識することができたというのが非常に大きかったと思う。今回の検討会の前提になるが、奥深さというのは様々な多様性があるということになる。それをどうやって守り、たくさんの方々に利用していただくかというのが非常に重要だと思っている。現地視察では、私は先導のガイドである、古賀さんのすぐ後ろについて行ったのだが、自然ガイド、山岳ガイドのガイディングの重要さというのを改めて感じた。これは非常に重要なポイントだと思う。

二つ目は登山道の荒廃のひどさである。全部の登山道を歩いたわけではないのだが、特に山頂部、森林部の上のところの荒廃のひどさ、それから特に最近の台風の被害もあって、数年でかなりの荒廃が進んでいる現状を目の当たりにして、これは長期的な登山道管理の指針の必要性と同時に、早急な措置がかなり必要ではないかと改めて考えた。また、ここまで荒廃が進んだら、修復を必ず始めるとというような整備をするときの基準のポイントを予め設定すること、場所ごとに設定することの必要さも感じた。

三つ目は花山歩道の魅力。おそらく一般的な登山道としては一番距離が長く、また原生自然環境保全地域に接しているということで非常に原生性の高いところを通った。この魅力は原生性であり、それを確実に保ちつつ利用を進めることが重要であり、そういう意味では利用をコントロールし、制限の中で利用を進めていく仕組みを作ることが非常に重要ではないか。

四つ目は、今回の視察では山頂部等にある祠をお参りする機会を作っていただいた。それぞれの祠がそれぞれの集落や地域の方々の信仰の対象となっているという実態がある。これが昔から日本の山にはあって、それが今も続いているということを改めて感じたことが非常に重要だったと考えている。

今言った事をまとめると、利用や保全の水準というのは昨日、一昨日のコースの中でも様々であったということ。全てを一律で考えるのではなく、それぞれのところに応じた水準というものを設定していかないとやはりだめだろうと感じた。つまりゾーニングの必要性が議論になるかと思うが、それを現地で改めて感想として持った。同時にゾーニングするとき、実際の管理の話になると、行政4者、民間の方々が様々な形で関わっている。つまりこの国立公園や世界遺産地域を考えると、地域連絡会議に参加している行政4者の方々の協議、さらにそれをもっと広げた関係者の協議をかなり密接に色々なレベルでやっていかなければならないということを感じた。

吉田 委員:私は今まで縄文杉や白谷雲水峡や花之江河の湿原など、日帰りで行ける所は色々回ったが、今回のように1泊2日で、花山歩道から淀川登山口まで横断するというのは初めてだった。とても良い天気にも恵まれて非常に良い体験をさせていただいた。

いくつか感想があるが、まず一つ目はこの屋久島山岳部の自然、特に奥岳の自然のすばらしさ、世界の中で誇れるもの、これを後世に伝えていかなければいけないという気持ちを改めて思った。奥深い自然体験ができる場所としても、日本国内でももちろんすばらしい有数のものであり、世界にも誇れるものということだと思う。今回の視察の大事なポイントとして、登山道の荒廃状況、侵食状況や台風5号の影響等を見ようというのが一つにあった。花山歩道から入って、鹿之沢小屋から永田岳に上がっていく途中や、宮之浦岳方面から翁岳の方に降りるところ、この辺りが特に侵食が激しく、鬼界アカホヤ火山灰が段々雨で削られていく、そこまでは普通の他の山でも同じような状況かもしれないが、そこが全部流されてしまって花崗岩が劣化した真砂土になると、一気に侵食が進むという感じがした。真砂土の中に、四角い長石が混じっているが、雨が降ったときに滝つぼのような形で長石が回されるとどんどん削ってしまうのではないかなと自分の感触としてはそんな感じがした。そこまでいくと侵食は止

められない状況になって、非常に深い溝ができてしまう、そういうメカニズムではないかなということ個人的には抱いた。そうすると、そこまでいかない間になんとかしないといけないわけだが、永田岳、翁岳に降りる辺りについては、非常に深掘れしている状況なので、こういったところは、もう修復というような何らかの措置をとらない限り、人の利用を制限したとしても自動的にどんどん掘れていってしまうというのは今後も続くということだと思う。これに対しては早急な対処が必要だと思うし、またそれが終わった後で一体どのレベルの利用をしていくかというのはしっかり検討した上で、先ほど座長からもあったようにゾーニングして検討していく必要があると思った。

二つ目は、屋久島全体の来島者数が山岳部利用に直結するとは思ってはなく、むしろ多少増えてもふもとのほうでバッファーになるのではと思っていたが、今回歩いてみて、この現地視察コースで12人しか会わなかった。今年は夏休みにも関わらずとても少ないと聞いたが、夏の間の航空運賃が高いとかそういうことも影響しているかもしれないし、そのほか九州の災害のようなことも影響しているのか、色々検討しないといけないと思う。屋久島に来る航空運賃が高いことが、すぐにこういう登山者数まで影響出のかなと感じたところがある。やはり全体の来島者数と奥岳への入り込み者数というのともかなり関係あるなということを感じた。それは今後のゾーニングを考えていく上でも非常に大事な要素だと思う。

三つ目は、あまりトイレだけの問題にこの議論をしたくはないのだが、私自身いつも携帯トイレを持ち歩いていた。実際に使ってみて、一回は使ってみるというハードルを越えてしまえば、リュックサック外側のポケットに入れるようにすればそんなに抵抗無く使えると思った。しかし、携帯トイレを持ってはいるけれどもなかなか使う人が少ないというハードルをどう越えるかというのが一つあると思う。また、山岳部では携帯トイレの推進ということは今後もやっていかなければならないと思った。一方、ふもとに段々近づいて淀川小屋あたりのところでは、山頂を目指す人と、淀川小屋に泊まって花之江河の湿原辺りを見て帰る人がいて、そういったレベルの人が混在しているところがある。そういうところはどうかやって考えていくのか、トイレ整備の仕方も、山頂まで行くつもりがない、そのぐらいの気持ちの人にまで携帯トイレを使ってくださいとするのか。あるいはそこが最後のトイレなのでそこから先は携帯トイレになるとするのか。世界遺産地域の入り口のぎりぎりのところということもあるため、今後の検討課題にしたいと思った。

柴崎 委員：15年ぶりくらいに花山ルートを歩いたが、現場から色々な情報を得ることができた。花山歩道を15年ぶりくらいに歩いた感じは、やはり何度歩いても巨木がそびえ立って、しかもその巨木は実は江戸時代の伐採跡もあるような決して手付かずだったわけではがそれ以上に自然の復元力がすごい場所だということを改めて感じるようになって、非常にすごいルートだなというのは改めて思った。ただ、私はずっと気になっていることがある。永田歩道も1990年代から歩いたことがあるのだが、その時代と今と比べると、原始的ではあるのだが、非常に歩きやすく、明るいという印象があった。ピンクテープが台風で飛ばされるのは当たり前で、二人組で行ったときは一人を待たせておいてもう一人がピンクテープを探しに行って「おーい、あったぞー」と言いながら、ピンクテープを探しながら地図を読みながら登っていった記憶がある。花山でも他のルートと比べるとそれほど草刈りとかはされてはいないだろうとは思いますが、それでも草刈りの維持管理がしっかりしているのか随分歩きやすくなったなという印象があった。それから花山広場を越えた先は、やはり崩れがひどい場所が見つかったが、確かそういう場所は当時記憶になかった。やはり原始的な場所でもそういう少し変化が起き始めているような気がして

いる。それは何故なのか断定はできないが、少なくとも色々な利用のやり方、管理のあり方に今後考えるべき点があるのではないかなと個人的には思っている。それと奥岳の一番核心的な部分は何度行っても素晴らしい空間であるなど改めて実感した。人工物もあまりなく、とりわけ岩がごつごつした特異的な空間だった。

今回は悪天候に見舞われることはなかったが、雨が降ったときには全く逆の顔を見せる。そういうことを感じさせる空間は維持しなければいけないし、そこに祭られている島民と山、祠との関わりを残していかないといけない。しかしそれを大々的に広めるかどうかは考えていかなければいけないような気がした。

もう一つ気になったのはやはり荒廃であり山頂付近、焼野三叉路から永田歩道までの荒廃、昔はあそこまでひどくなくて、もう少しササが生い茂っていて、かき分けて進んで行けるような感じだったが、今はかなりえぐれて深くなってしまっている。1990年代後半は、あれほどは広がっていなかったような印象があるので、奥岳の地域というのはちょっとしたことで環境が激変する場所なのだなど痛感した。同時に花之江河は、水量が減って湿生植物が減ってしまっている状態というのは景観の観点からも世界自然遺産の価値を損ねることにつながるのではないかなと思っている。2009年から科学委員会でも重要な問題としてずっと提起されてきたが、結果的にこれは解決されない。もちろん対策は一部行われているが、抜本的に対策が進む方向が見えてこないというのは残念であり、これは研究者としてはもう少し行政のガバナンスシステムを変える必要があるのではないかなと痛感した。

また携帯トイレについては、これまで何回か使ったことはあるが、吉田委員の感想にあったように、最初のきっかけさえ越えれば結構使えるものだと思う。慣れてしまえば携帯トイレはもう少し普及が進むだろうと思う反面、デザイン性、利用性についてはもう少し改善して一般の方にも受け入れやすいような工夫をしていけばよいのではないかなと思った。

鹿児島県自然保護課 羽井佐課長:8月16日付けで自然保護課長に着任いたしました羽井佐と申します。久しぶりに屋久島宮之浦岳に行った。前回は確か2007年頃、その前は17年くらい前に縦走しているが、非常に大きな山だなどというのが今回登って改めて思った。幼稚園のときに芋ほりをした経験が、皆さんもあるかと思うが、その頃の芋の大きさは自分の手と比べているので、とても大きなサツマイモをとったような印象が残っている方が多いと思うのだが、今回はその逆を感じた。体力の有り余っている大学するとき、もう少し若い頃縦走したときには、宮之浦岳から永田岳はそんなに距離がないように感じていたが、今回非常に長い道のりだなど改めて思った。一般の方や、山にあまり入ったことのない方があそこに入城すると、同じような印象をきっと受けるだろうなどと思って、やはり事前に厳しい山だということを知って伝えていくかということが大切だと感じた。

何点か感想を述べると、花山歩道から淀川までの道のりの印象は、国立公園の地種区分に合致したような景観が広がっていると感じた。地図と比べてみると第3種特別保護地域から原生自然環境保全地域、第1種特別保護地域に入るあたりでは景観の質が非常に良くなるし、淀川小屋を越えてしばらくすると段々下界に近い、人の手の入った森だなど感じてくるという印象を受けた。色んなタイミングで情報発信をどうやってできるのかと感じた。

今回花山の入り口に少し遅れて集合したこともあり、あまりじっくりと登山道入り口の看板を見る時間がなかったこともあるが、登山者への情報発信は非常に難しいと感じた。登山口に集合したときには

大体皆早く登りたいので、靴紐を結ぶ等はあるかもしれないが、あまりそこでゆっくりすることはないと思う。じっくり看板を見るというのは実はあまりしないのかと思った。また登り始めるときついで、あまりじっくり看板を読まなくなると思ったのと、下山したときも淀川登山口のところの写真を私も一枚も撮っていなかったのだが、おそらく写真を撮るという余裕もなく疲れているのだなと思った。登山者に対する情報発信はもしかしたら登山口に着いてからでは遅いのかなという印象を今回の山登りで思った。そうなるとう島という利点を生かすと、情報発信はその前までに色々やる機会があるのかもしれない。例えば登山者の多くの方はレンタカーであったり、タクシーに乗ったりするのでその中や、あるいは船の中とか、既にやられているとは思いますが、そういうところで携帯トイレの快適さだとかを伝えていけるかが勝負だと感じた。もう一つの良い印象は、本当にゴミが少ないと思った。色々な山を登っても、ちょっとおしっこをしたいなという場所に行くティッシュの花が咲き乱れていて、人間の生理現象のタイミングって一緒だと思うことが非常に多いが、今回はちょっと中に入ってもそんなに目立った所がない印象を受けた。登山道沿いのゴミも非常に少ない印象だった。これが何からくるのかなと少し想像すると、ガイドさんがいるという効果なのかも思った。ガイドさんがガイドする以外に、ガイド業をする裏で、山で暮らしている人たちがいるとマナーを徹底するということもでき、それから自分自身がお客様に良い質の体験を提供するためにゴミを拾っているのかも思った。

それから携帯トイレをいたるところで使ってくれとアナウンスしていることで自分のし尿を持ち帰れと指導している山で、ゴミは捨てないとか、ガイドさんがいることとか、携帯トイレを普及しようとしていることによる波及的な効果というのものもあるのではないかも感じた。

整備については、その一例として整備した場所が壊れたけれども、壊れた資材で歩きやすく補修している場所がたくさんあった。そういう山は日本にもいくつかあるかと思うが、地元の方やガイドさんがよく入っている山にはそういったところが多いという印象を持っている。そういう場所は整備してある場所よりも返って歩きやすかったりして、日常的に登山道に手が入っている山の歩きやすさ、ありがたさを感じた。

屋久島山岳ガイド連盟 古賀代表：一番印象的だったのは、大人たちがこれだけ屋久島のことを考えて、夜も天の川を見ながら語り、トイレの前で大人たちが時間を忘れて語り合うというのが、私は一番嬉しかった。今回はものすごく条件がよくて、次回の縄文杉、白谷はできれば大雨になって、自然の厳しい面も体験できたと思う。ガイドは、補修やパトロールもやっているが、それは県や町、環境省からの予算をいただいて、請け負ってやっているということもある。環境省でもアクティブレンジャーの方、林野の方もパトロールしているので、それぞれの方が補修等を行っている。アクティブレンジャー、林野のパトロール、ガイドのパトロールの情報交換は実はあまりできておらず、ガイドのほうの配慮も足りないと思うが、どこが壊れているとかそういう情報交換がまだできていない状況である。それができるとパトロールで見るとかぶるところがあるのかなと思った。

土屋 座長：参加した一部の方に意見・感想を聞いたが、今日の議論の中でも、まさに今出てきた様々なことが論点になっている。そこについては今ご発言された方ももう一度繰り返しが発言していただくのと同時に、会議に参加されている皆様からも会議に関連したことについてまた色々ご意見いただければと思っている。

■ ビジョン検討にあたっての主な論点について議論した結果の整理

◇ 資料2について

【資料説明】

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：本年度の第1回検討会では、主な論点1.、2. について議論して、意見を出していただいた。加えて、平成27年度には有識者や島内関係者から「屋久島の山らしさ」について意見聴取しており、柴崎委員からも第1回検討会後にご意見をいただいている。これらの意見を共通するテーマごとまとめ、改めて紹介。

土屋 座長：第1回検討会での議論について、エッセンスだけ説明があった。かなり多様な意見が出て、それぞれの方の様々な思いが出てきて良い議論ができたなと思っている。時間が足りなくて必ずしも突っ込んだところまでいかなかったのも、その辺をこれからも詰めていかななくてはならないと思っている。今回は、前回あまり議論ができなかった「3. 利用者へのサービスについて」にいくわけだが、その前に前回の今ご紹介いただいたような資料2に基づく様々な論点について他の方からのご質問があれば出していただければと思う。前回欠席だった柴崎委員の方から、紹介されたことに対して補足のよう形で発言をお願いする。

柴崎 委員：ビジョンの資料を見させていただきながらコメントしたことも踏まえて、屋久島の魅力は何かかなと思ったときに、いわゆる原生的な場所から都市的というわけではないがもう少し開けた場所まで様々なレベルですごいものがあるということは認識しておいた方がよいと思っている。

一つ目に、屋久島の魅力としてはやはり今回訪問した人智を超えるような、広大な空間が広がって岩もごつごつしていたりとか、神聖な気持ちになるような場所というのは当然宮之浦岳がある。それに近い場所で、黒味岳もそれに入るのだが、岳参りの登山の場所である愛子岳や七五岳からもすばらしい景観をみることができるし、一番観光化されているのは太鼓岩だったりするわけで、非常に幅がある色々なものがある。

二つ目には、素晴らしい森が広がっている場所がある。代表的なのは巨木があちこちにあるという意味で花山はすごいと思う。花山を歩きながら思ったのは、ハリギリ、ヤクスギの巨木がいっぱいあるが、よく考えたら見たことあると思ったら、ヤクスギランドや白谷雲水峡も、スケールは違うがそういう場所である。そういう素晴らしい巨木が広がる、しかもそこが長い目で見ると二次林だったりして、そういう場所が魅力としてあるのかなと思った。それから巨木や軌道、人との関わりがよく分かるような場所が縄文杉だと思うし、龍神杉歩道もある意味文化的なものも学べる、しかも巨木が広がる空間、そういう要素があるのだと思う。それからやはり川や滝というのもすばらしい要素であって、昨日歩いて思ったのは、淀川の上の沢というのは非常に美しいと思うのだが、それは里周辺、ちょっと行くと、淀川まではいかないにしてもそれに匹敵するような沢がいっぱいある。巨木や巨岩が広がる神聖な空間と深い森がある空間、森と人々の暮らしがわかる、そして森は縄文杉のように巨木があるような空間、川とか滝という空間では、その原点になっているのが何かと思った。自分が昨日も歩いてみて思ったのが、屋久島を構成する根源はやはり水にあるのかと思う。水は、森もつくるし、川もつくるし、時には侵食もするが、それでむき出しになった花崗岩ができるかもしれない。屋久島憲章で言われたような、いつ

でもどこでもおいしい水が飲めるという水に対するリスペクト、山に対するリスペクトが大事なのかと思っただけである。

土屋 委員：キーワードとしては「水」ということがこれまでも出てきたが、改めて強調していただいた意見だった。

宮之浦岳参り伝承会 中川会長：第 1 回検討会での発言を補足させてもらう。資料 2 の P2 には私の発言として「利用することと信仰することは相反するものではない」としているが、これは資料の中に「相反することをどうするか」と書いてあったので、その言葉を用いたのだった。もう少し進んで言うならば、利用と信仰は相反するものではなくというより、むしろ一緒にあるべきものとする。信仰しながら利用するというので、いつも一緒でなければならないもので、この 2 つは切り離してはいけないものと考えている。

土屋 座長：利用することと、信仰することは相反するものではなく一体であるという意見だった。

吉田 委員：資料の付け加える部分として資料 2 の P4 には、他地域の比較で書いたところで、「標高差が大きく」というところから書いてあるが、私の発言としては、花崗岩が地中で固まって、それが急に上昇してできた山であるというところは非常に重要で、登山道の修復のことを考える上でも、今回行ってみて、それが比較的脆くて、真砂土になって掘れてくるという現象にもつながっている。先ほどお話があったように山頂部で大きな岩が見えるという景観にもなっている。それから非常に早い隆起で上昇したがために雨がしみこまずにそのまま流れてくるという、その流量の多さにもつながっている。そこが全ての源泉になるので、それを省略しないで入れていただきたい。

土屋 委員：要するに花崗岩が基盤であるということが、この屋久島のあり方の色々な面に出ているということより強調したいというご意見だった。

鹿児島県熊毛支庁屋久島事務所 泊総務企画課長：去年から屋久島事務所に来ているのだが、もともと生まれが屋久島であり、小さい頃から岳参りを経験している。昭和 32 年に屋久島に産まれて、その頃はまだ登山客は少なく、世界自然遺産に登録されてから人が入ってきて大分雰囲気も変わってきた。外を歩いていると外国の方も大分見かけるようになった。屋久島の魅力が色々なところで外に向かっていっているということについては、地元の人間として誇れる部分だと思う。しかしその反面、外から色々な人が入ってくると、様々な面で軋轢などを、ときには感じることもある。山に入るということはむしろ地元の人は少ないのかとも思う。親の時代には、山に入るのは営林署が主で、それ以外の人はそんなに入ることもなかった。安房だと、岳参りのときに集落の人と太忠岳とかに登った。そんなにしょっちゅう入る習慣はなかったが、こういった形で色々な人が入ってくると、地元の人との意識の違いは私も感じる部分がある。ある程度山の中の登山道で、制限というか、気軽に行けるところと、それなりの技量を持った人が行くべき所という整理が今後必要なのかなという気がする。私も宮之浦岳までは行ったことはあるが花山歩道を通ったことがないので実際どういう状況なのかかわからないが、気軽に登れるところ

と厳しい所の線を考えていった方がよいのかと思う。

土屋 座長：屋久島出身ということの面も含めてのご発言だった。貴重な立場だと思うのでこれからも是非お願いしたい。

鹿児島県自然保護課 羽井佐課長：信仰と利用の話が非常に興味深いと思った。山にゴミが少ないという印象を持った背景として、携帯トイレが普及していることとかガイドさんがいるということとか、それからもう一つ信仰の山だということが上手く伝わっていて、利用者の行動に反映されているのであれば、それはまさに信仰と利用が共存している、切り離されていない一例なのかと思った。それから、山の水を汲む場所の水の太さに感動した。沢から直接水を取る様な場所が何箇所もあり、全国の山を歩いているわけではないので比較はできないが、結構太い所から「これが全部飲めるのか」というような感覚だったので、それは大きな屋久島の魅力なのかと思った。

土屋 座長：確かに他の所に行くとチョロチョロしたようなところからしか水が取れないということが多いかと思う。

屋久島山岳ガイド連盟 古賀代表：ゴミが少ない要因の一つとして、携帯トイレが普及したことによるという話があったが、私は2000年からガイドをしているのが、携帯トイレが普及する以前から元々登山道沿いはゴミが少ない状況だった。基本的には屋久島に来る方は、縄文杉に登りたいとか自然を感じたいとかある程度明確な目的を持って来るので、屋久島に来る観光の方自体が、もともとマナーの良い人ということはガイドをして感じている。ゴミとしても例えばポケットから飴を取り出すときに落ちてしまったゴミとか、ザックにつけていたものが間違っ落ちて落ちたゴミくらいになる。あとはパトロールの方が間違えて落としたようなゴミを拾っている。2000年当時からゴミは少なかったという印象がある。

大山 オブザーバー：ゴミの問題については、昭和38か39年くらいに尾瀬がゴミの持ち帰り運動を始めた。ゴミかごを置いたらかごにいっぱいになるので、ゴミを持って帰るということで、ビニール袋を配布したというのが、日本のゴミの持ち帰り運動の始まりだった。尾瀬がやって成功したということで、屋久島もやろうということで、屋久島高校の山岳部が港でゴミ袋を配布したりチラシを配布したりしたことから始まっている。それまでは山小屋もそうだったが、高塚小屋も、昔は缶詰の空き缶は掘って埋めていたことから、飲めなくなった。それではいかんということで行政も立ち上がってゴミの回収を始めた。そういうこともあって、屋久島の山ではゴミを捨てないというのが皆の中に意識付けられ、ゴミがないところには客もゴミをなかなか捨てない。縄文杉まで議員が行ったときも、言われたのはタバコの吸殻がほとんど屋久島では落ちていないということだった。そのときはどこでもタバコの吸殻が落ちていた時代だったが、それだけ徹底されて、その時代からゴミ運動が住民で始まっていた。それが今に至っているのだと思う。

土屋 座長：今までこの論点は意外に出てこなかったが、信仰の山であることもベースにはあるが、大山委員からの意見にあったように、地元、地域としてゴミを減らそうという運動に早くから取り組んだこと

が今に至っている、これは非常に大きな、そう簡単には他の地域には真似できない屋久島の隠れた魅力であり、記憶しておくべきだと思った。

屋久島町役場 矢野環境政策課長：議会中で現地には行けなかったが、皆さんの意見や感想を聞いて非常に参考になると思っている。屋久島町としては色々な計画も作って、その中で自然環境の保全、特に水と環境の保全ということで謳って色々な計画はそれを基に作っている。行政が考えていることは地域住民がいかに活性化するか、集落が活性化するかという論点で計画を作っているの、島全体を軸として計画を作って実行していくと考えている。色々なビジョン作る時にはやはり島全体、口永良部島も含めて考えていきたいと思っている。

土屋 座長：これは第1回検討会のときに「まるごと」というのが一つのキーワードとして出たことに対する反応だと思う。それも非常に大事な論点だと前回は強調したところだった。

柴崎 委員：先ほどから山に来られる方は環境意識が高いという意見があったが、私も同意する。むしろ観光客の方から教えられることが多い。観光客が落ちているゴミを拾っているところを見たことがあり、屋久島だからできることの一つとして、新たな山の文化みたいなものを屋久島から発信できるのではと思っている。むしろ屋久島だから多少の不便は分かっているけれどもそれだけでなくそれ以上に貢献できたら嬉しいと思っている方がいると思う。すばらしい体験の中の一つに携帯トイレを使うということの意味が伝われば、山に来る人は決して不満を言わないのではなか。もうすこし科学的な調査が必要かもしれないが、その可能性は十分高いと思っている。

これまでの欧米のスタイルの体験の質、満足を越えた何かをこちら側から発信することが、逆に屋久島の価値を長期的には高めるということを伝えたい。そのバックグラウンドとして観光客、登山客が逆に屋久島から誕生するかもしれない新たな価値を支えてくれるのではというのが私の仮説である。

■ ビジョン検討にあたっての主な論点(検討の順にて再整理)

◇ 資料3について

【資料説明】

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：現地視察を踏まえてビジョン検討にあたっての主な論点3.(3)、(5)について議論する。論点ごとに議論のたたき台として現状や考え方を赤字で記載している。これをもとに議論して各論点についての考え方等を取りまとめていきたいことを説明。

土屋 座長：それではこのところが今回の一番重要な議論をするところになる。資料3「3. 利用者へのサービスについて」のところは便宜上2つに分かれている。(3) 利用施設の設備と維持管理についてということに関しては、利用の区分のあり方、保全の区分についてのあり方や議論の部分と、トイレの関係のこと、登山道の侵食、荒廃、避難小屋等の老朽化といったような施設整備の問題、それからルート管理責任の問題等もここに入っている。(5) 安全についてとかなり密接に関連する。このため議論が前後しても構わないが、(3)の論点に書かれているようなことに関連したことを先に議論していく。

吉田 委員：資料3のP1から順番に意見を述べていく。(3)利用施設の整備と維持管理では、「徒歩利用」という書き方だけではなくて、屋久島山岳部というのは質の高い自然体験を提供する場なのということになる。それをまず大前提として、その質の高いというのが一体何なのかという中身、やはり長い距離歩くのも質の高い自然体験の一つになる。それから登山道整備の考え方は後のROSの中で出てくるかと思うが、利用者の多寡やルート難易度だけではなくて、屋久島の場合にはそれにプラスして「道の迷いやすさ」というものもあるのではないかと思う。山に登るのは大丈夫という人も迷うこともあるので、そういったものも含めて難易度を決めていかななくてはいけないと思う。最終的にはランク分けすると思うが、そのときに内訳をしっかりとみる。決して急ではないけれど道に迷いやすいところがあるので、そういったことも加味する必要があるのだろうと思った。

次にトイレの問題については、これは色々な議論が出てくるかもしれないが、質の高い自然体験というものにトイレがどう関係してくるかということになる。質の高い自然体験では、豪華なトイレをつけるのは質の高いという意味にはならないと思う。では何がよいかというと、ここに書いてある「避難小屋付帯の汲み取り式トイレを軸として」という書き方は非常に嫌で、今の状況の避難小屋付近の汲み取り式トイレのし尿は担ぎ降ろさなくてはいけないので、環境保全協力金を使うことになる。私が今の状況を見てこういうことを言うと、努力して昔より随分よくなったと言われてしまうので、その批判があたるかどうか分からないが、ただ汲み取り式トイレの周りに汲み取りの柄杓とかバケツが散らばっているとか横に置いてあるのがすごく目に付く状況にあるというのは、質の高い自然体験をする場所としてはあまり適切ではないと思う。汲み取り式トイレであっても、ああいうようなものが目に付くような形で置いてあるという状況はなくしていかなければならない。もし気候的な問題も解決してバイオトイレに移行できるのであればそちらのほうにしていこうという方がふさわしいと思う。但し、汲み取り式トイレを全てバイオトイレに代えれば解決するというのではなくて、場合によっては汲み取り式トイレもなくしてしまって全部携帯トイレにしてしまうことも質の高い自然体験になると思う。携帯トイレを使ったことのない方からすれば、山に行ったのにトイレを全然用意してくれなくて、携帯トイレのボックスしかなかったと思う人もいるかもしれないが、屋久島ではこのように決めて、山の環境を悪くしないためにも、あるいは山小屋の周辺で悪臭がするような状況、あるいは汲み取り式トイレの染み出しの問題等で水環境に影響を与えないためにも、携帯トイレのボックスを設置しているのだと、みんなが覚悟して入山するというのも質の高い自然体験になり得る。そこはきちんと考えていかなければいけない。最初に書いてある「汲み取り式トイレを軸にして」は、これは今暫定的であると思う。

登山道侵食は、ここに書いてあるとおりだと思う。「一度トリガーがひかれた」と田中さんが説明されたが、侵食が真砂土のところまで進み、どんどん掘れてしまう状況は放っておけばどんどん深く掘れてしまうので、これは早くなんとかしないといけないと思う。その上でどのくらい歩きやすいところにするのかというのは、登山ルートの難易度による登山道整備の考えかた、これはそれに基づいた整備をするというようなことではないかなと思う。

土屋 座長：トイレについてさきほど冒頭のところで言い忘れたので追加すると、今回の現地視察ルートの翁岳の鞍部や花之江河で、かなりしっかりした携帯トイレのブースがあった。一般的にはテント型のものが多いなか、もちろん設置場所やコストの面から言ってどちらがいいとは言えないが、小屋型の携帯トイレは衛生面で非常にきれいだった。汲み取り式トイレは衛生面、においや恐ろしさがあるが、あ

あいった少しコストがかかるけれども設備として水準の高い携帯トイレを普及していくことがひとつ重要なのではないかとすることを付け加える。

大山 オブザーバー：トイレの問題だが、平成 20 年から汲み取りを始めた。汲み取りを始めるときに、随分と屋久島のトイレをどうするかが住民の間で議論になった。その中で、汲み取りというのはこんなに大変なのだと、し尿処理はこんなに大変なのだというのを登山客に分かってもらうために、逆に見えるように運び出しをやろうとなった。そうすることで地元にお金が落ちるということもあった。運び出すのにお金がかかるので、地域の収入にもなる。そこの二つの目的で汲み取りを始めた。ただそれだけでは足りないので携帯トイレもということになった。夏場の汲み取り式トイレにはハエもいてなかなか利用できない。あれを利用するには本当に勇気がいる。そういう環境が果たしていいのかどうか、色々な問題がある。その点について、今 20 年経ってここで将来像をどうするかということだが、できれば汲み取りが絶対的ではないということ言われているわけだが、20 年経って、環境省なり県なり町なり行政でどういう反省と結論をもって、今後の方向性を持っているのかその辺が全然これまで示されていないが、どうなっているのか。

土屋 座長：行政というと、どこからの意見が必要となるのか。

大山 オブザーバー：県であったり町であったり、トイレの管理が違うのだが、それぞれに汲み取り式の今のやり方を今後もずっと継続していくのか、それがベストなのか、それとももう一回考え直して別の方法を考えるのか。例えばバイオトイレを高塚に入れたが、これが果たしてうまくいっているのかどうか。白谷雲水峡に大きなトイレあるが、集中利用されるとほとんど機能しないで、そのまま白谷川に流れていく。大腸菌の問題は大丈夫かもしれないが、人間の感覚としては、水は飲めない。今でも白谷の本流の水は僕らガイドとしては、お客さんに「これ飲んでもいいよ」とはなかなか言えない。そういう感覚的な問題、衛生上はよいかもしれないが、感覚的な問題もあってそれも含めてトイレ対策をどうしていくのか、それをそろそろ検討しなければいけない時期だし、結論が出ていてもよい時期だと思うが、その辺りどうなのか。

土屋 座長：非常に重要な問題提起が出た。この辺のところはこれまでも色々なところで議論されてきたところであるが、必ずしも明確な方向性、ビジョンというところまでいっていないところがある。

屋久島山岳ガイド連盟 古賀代表：以前の検討会でも話しをしたが、行政と観光協会との話で、以前奥田さんという環境省の方がいたときに、観光協会ガイド部会と環境省で色々話し合いを持つ場があった。その時は汲み取りトイレしかなかったが、TSS トイレができて、携帯トイレの導入は賛成だが、既存のトイレを改良、もしくはバイオトイレを導入するという前提でガイド部会としては協力、推進していくという文書が残っているというのが行政の最初の方針だったと記憶している。トイレの現状としては石塚小屋のトイレがドアも閉まらない状態にある。今後トイレについて考えるときには、全体を一気に解決することはすごく難しいと思う。例えば昨日現地視察でも淀川小屋の汲み取りトイレの前で話し合っていたときに、小学生くらいの女の子が暗い汲み取り式トイレ利用に躊躇していた。屋根をアクリルと

かにして少しトイレの中を明るくするだけでもかなり雰囲気改善される。例えば高塚小屋もレモンガスさんが寄付してくださったときに内装を変えたが、それだけでも大分雰囲気が変わる。近い将来にできる対策というのもここでできたらいいし、携帯トイレに関してもガイド部会として反対ではないが、こういった会議でいつも出るのが全部携帯トイレにしたらどうかという話が出る。それは極論なので、ガイドをしている立場からするとそれは難しいのかなと思う。それは恐らく次回の縄文杉の現地検討会では、なんとなく感じるかと思う。携帯トイレに関して、それぞれのルートごとに考えてもらえると助かる。全部という意見だとなかなか前に進まないと思う。まずできる対策というのを話して頂きたい。そして、携帯トイレというのは実際使って、登山口まで下ろした後は島の中でどのように処理されているのか、これから屋久島で新しい「モノサシ」を作るというのであれば、そこまで考えてもらいたい。島に住む人間としては、山で問題を解決しても、そのものが里に下ろされ、そこでクリーンセンターで処理をするのだが、携帯トイレだけではなくて、汲み取り式トイレのし尿についてもそれがどのように処理されているか、最終的に石油で燃やしている。そしてバイオトイレのし尿は最終的に水と二酸化炭素に分解するが、それぞれのトイレの形式で最終的にそのものがどうなっていくのかということまで考えていくのが環境教育という意味ではふさわしいのではないかなと思う。私はお客さんに最終的にどこまでということについて、興味がある人にはお話している。「まるごと屋久島」という話も出ているので、トイレというのが最終的に屋久島で里までいってどうなるのかまで考えていただくと面白いのではないかなと思う。

土屋 座長：古賀さんの発言に付け加えると、昨日（8/19）の体験になるが、淀川小屋でお母さんに付き添われて小さい女の子がトイレを利用しようとしたが、夕方で薄暗く、中をみてかなり長いこと考えて、結局躊躇して使わないで帰ってしまったということがあった。また「まるごと」というのを、処理的な面も含めてまるごと考えるという新たな指摘もあった。その前に、大山さんからは「行政はこれからの対策としてはどう考えるか」というご質問があったが、これについて行政の方から意見をいただきたい。

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：これからどうしていくかということではなくて、ここ数年でどういう考え方でやってきたかということをもまず説明する。H22年に携帯トイレの普及を始めるときに屋久島山岳部利用対策協議会（現 屋久島山岳部保全利用協議会）では、「携帯トイレの導入方針について」という携帯トイレだけではない既存のトイレ、その他のことも含めた考え方を作って、それに基づいて今日までやってきた。携帯トイレについては古賀さんからあったように、縄文ルートでは補足的な役割で導入していく、宮之浦ルートでは縄文ルートよりももっと積極的にやっていく、それから先ほどおっしゃられたように小屋についている汲み取りトイレというものは、それはそれとしてやっていくと、つまり並行してやっていくという考え方があった。

それから、先ほど出てきた新高塚小屋の環境省のTSSトイレのことでは、これは試験的に利用の多い新高塚小屋に導入して、その結果を見て他の小屋等への展開を検討していくとしている。さらにその前提として、利用調整を前提としてということになっている。昨年度の検討会の資料には導入方針そのものを添付しているが、今日手元にはないが実は前文のあたりに「利用調整を前提として」というフレーズがある。そういった考え方に基ついてきてこれまでやってきているが、H22から7年くらい経過したところだが、その間にH23年に縄文杉の利用調整の話が議会にかかり否決され、条例は可決されなかった。

TSS トイレについては、H22 に供用を開始したが、H25 に一度、調子が良くないということで完全クローズして、H27 の 5 月から再度オープンしてやってきている。今も供用を続けているが、3 月シーズンはじめなど、調子が悪くなったら一時的にクローズして、調子がよくなってきたら開けるということをし繰り返しながらやってきていて、観光協会さんにも維持管理、点検についてご協力いただいている。私たちも直接点検をして、調子が悪いときは色々手当てをしているが、感想としては、供用を続けることはできるだろうと思っている。ただし、非常に人的コストがかかると思っていて、今の状況を考えると他の小屋に展開するには、それなりの設置面積も必要であるとか、3 月に調子が悪いのはおそらく朝昼の気温差が大きくて、特に夜の気温の低下、低い気温の時には蒸発散がなかなか進まないからと思っているが、そういった諸々のことを考えると他の小屋への TSS トイレ展開はなかなか厳しいと思っている。大山さんのご質問にストレートにお答えすることはできないが、私の認識としては H22 に作った携帯トイレ導入方針、つまり屋久島山岳部のトイレのあり方についての考え方を H22 バージョンから改訂する時期にきていると考えている。大山さんは汲み取りトイレをなくしてという未来像、分かりやすい答えを期待していたかと思うが、今の段階では色々な意見があって、そこまではお答えできないというのが一番正直で率直な答えになるかと思う。

この場は山岳部利用全体のビジョンを考えていくというところが非常に重要なテーマの会議であり、トイレに関しては個別的には保全利用協議会で色々議論をしながら考えていく必要があるのかと思っている。

屋久島町役場 環境政策課 内田自然環境係長：4 月に着任してから、協力金が始まって半年が経ったタイミングで、それまでに屋久島町、屋久島山岳部保全利用協議会の方ではインターネットで意見の募集と、縄文杉ルートの荒川登山口でアンケートを 500 件集めている。実際の利用者の声を集めるため、それを集計しているところだが、8 割程度が協力していただいているという表現だったが、500 件のなかでは 9 割は協力していただいているという数字だった。縄文杉のルートなので、協力金の大きな使途はトイレの問題なのだが、縄文杉の場合にはバイオトイレと大株歩道入口トイレでほとんどが利用されているので、あまりし尿の担ぎ出しという点では関係がないかと思われるため、その辺の声アンケートから出てくるかと思っていたが、実際今私が見ている範囲ではそこは関係なく、どちらかという踏み板の問題とかに投資してほしいという声が出てきている。そういう意味ではトイレのこれからの方向性というのはアンケートからは出なかったが、田中さんがおっしゃったとおり、その辺を踏まえてそろそろ改訂の時期になっているのであればそれも保全利用協議会で協議していかなければならないのかなというのが保全利用協議会事務局の担当者としての感想だった。

土屋 座長：町の方で世界自然遺産屋久島山岳部環境保全協力金を始められたが、その主な使途では、トイレの担ぎ出しの費用等も含めた部分にある程度使うというのがあるが、それをめぐって将来的にどうするかという議論がどの程度されたのか外部から見えないがどうなのか。

屋久島町役場 矢野環境政策課長：山岳部保全利用協議会の事務局として町が関わっているので発言する。協力金の使途の第一にトイレの環境をよくしようということを目標にしている。大山さんの発言にもあったようにトイレの問題が大きな課題となって、H20 から担ぎ出しを始めた。最初は募金という形で一

口 500 円を協力いただいたが、なかなか資金が集まらなく、山中にし尿が増えてきたということ、制限の話も踏まえて始めたこの協力金制度は長い時間をかけて議論した結果が今このようになっている。第一にし尿の搬出をあげている。それと質の高い自然体験という発言が吉田委員からもあったが、安心安全な自然体験ができるように環境整備をしていこうということで、協力金がどれだけ集まるか、目標は定めてあるが、始めたばかりで先が見えないというのもある。なんでもかんでもできるというわけではないが、先ほど踏み板の話があったが、安心安全な面を少しでもそれに役立てるということで、使い道の中にも入れている。トイレの問題もあるが、登山道のトロッコの問題もあるので、そういう面での安全もある。そういうことを含めて考えるということで色々な話も出ている。山での遭難、急患も含めてトロッコの使い道ができないかというのも一つ課題としてあるため、この協力金で何もかもできるといわけではないが、そのように用途は、色々な面で使えるようにはしていくということで協議会の中で話をしている。トイレについては、バイオトイレはやはり電気がないと機能しないというもあり、軌道には電気は通っているため、この部分にはバイオトイレがよいのかなと思っている。協力金をもらうということでは、縄文杉ルートの方々にはそんなに関係ないのではという話もあるが、全体として考えていくということでこういう制度になったので、これを続けていきたいと思っている。トイレについては全体のあり方、観光面も当然関わってくるので、行政 4 者、県の観光課も含めて多くの関係者で協議をしていくということにしている。すぐには答えが出ないかもしれないが、そういうことで協議をしているという現状である。

鹿児島県自然保護課 羽井佐課長：大山さんからの発言の中に、白谷のトイレの話が出ていた。鹿児島県自然保護課で所轄しているトイレであるが、これも正直ベースの話として、状況としては問題を認識していて、検討中ということになってしまう。現時点でそれ以上の細かい状況をお話できる状況にはなっていないため、色々なご意見を聞きながら引き続きどうしていくべきなのかを考えている。あまり具体的にないが、正直ベースでそういう状況である。

屋久島森林管理署 川畑署長：どちらかというと今お話のあった 3 者行政の方は観光推進とか公園管理という観点の立場になる。先ほども出たゾーニングの話になるが、島の 8 割が国有林である。特に私どもとしては、入っていく所と入りやすい所という観点では、一つはレクリエーションの森という制度を昭和 40 年代に創設した。屋久島ではヤクスギランド、白谷雲水峡、この二つしか目を向けていないが、大川の滝風景林、千尋の滝風景林、田代浜風景林ということで、実は海岸にも国有林がある。「どうぞ国民の皆様来てください、レクリエーションを楽しんでください」ということで 5 箇所設けている。そういったところは可能な限り誰でも行けるように、バリアフリーで体の不自由な方も来て頂けるように整備するという必要も必要と考えている。また、奥岳については登山となるためその整備については、関係機関に協力していくという立場になる。

具体には、今議論されているトイレ、後ほど登山道も出てくると思うが、これについては各関係機関が色々な公園利用される方のためにトイレを設置するので、場所を提供、土地を貸付させていただきながらトイレ設置等が円滑に進むように協力していくという立場ということである。林野庁としてはレク森についてはレク森保護管理協議会の方々が対応頂いているが、それと連携しながら、昔作ったトイレ等は新設という観点ではなく、改修という観点で今年度ヤクスギランドでも必要であれば改修をやって

いくという立場である。引き続きトイレの問題についても、関係機関 4 者と、保全利用協議会でしっかりと議論するよう考えている。

土屋 座長：レク森については、個人的な意見だが非常に重要な部分だと思っている。バリアフリーという話もあったが、一番利用の初歩的な方でも利用できる場所として非常に重要であり、全体的な位置づけでもはっきり色分けをつけて整備していくことが重要だと思っている。

大山 オブザーバー：行政の皆さんの見解をお聞きしたところ、結局は今の所は現状を知った上でやるということになるかと思う。問題点は細かいところに色々あるでしょうが、現状のやり方を継続するということになる。それとも、まだここが問題だからこういうことをなんとか検討していくとか、こういう目標に向かって変えていきたいとか、今後の方向性とか。今ここに問題になっているから議題に出てきている。

皆様が実際に現地視察で見えてきて、果たしてどのような問題があったのか、どの辺がこれから検討されるのかと思っている。その前に現状を行政がどう捉えてどういう方向で進もうとしているのか聞きたかった。

土屋 座長：今の大山さんのお話は、これから先のビジョンについて、それぞれの 4 者の方に必ずしも明確に語っていただいたわけではないと思うが、その部分はもちろん保全利用協議会の方でより具体的な話をさせていただくとして、もう少しビジョン的な、将来的な話についてはこの検討会ですり合わせ、関係者の意見を聞きながら少し前に進む方向で考えていくというのがこの検討会の役割だと思っている。

柴崎 委員：私は 20 年間、屋久島の山を見てきた。論文では 2005 年くらいからずっと言い続けていることになるが、これまでの対応は全てなし崩し的に行われたことに対する場当たり的な対応しかされてこなかったというのが正直な感想になる。その結果何が出てきたか、登山では、施設整備はかなり進んだ。要は人が多くなって来て「施設を作ろう」、トイレが足りなくなったから作るしかない、寄贈してくれる人がいるから作るしかないという当時の議論があって、それを誰も止めることはできなかった。それで何が起きたかという、歩道も崩れ始めているところがあり、またものすごいコストがかかってくるのではと思っている。トイレに関しても先ほどの話では、全面携帯トイレは極論だという意見があったが、私は逆で、トイレがあれば山に整備されてきたという状況が、むしろ逆に極論のやり方をしてきたのではというのが私の考え方である。1990 年代後半に、荒川口から縄文杉に行くときにトイレがあったのは荒川口と、高塚までしかなかった。それから次々とバイオトイレとかいっぱい出てきたような気がする。結果的にいうとそれでどんどんお客さんが増えるという現象があり、先ほどの環境省さんからの話からしても、自分の研究結果からもそうなのだが、維持管理費が膨大に増えてくることになる。それにどうやって対応するかを今考えなければいけない時期にきている。正直な感想を言うと、山奥の場所についてはやはりローテクでやるしかないのではないかと思う。例えば、千葉県房総半島で過疎化が進んでいる地域あり、そこで用水路が残っている。どういうものが残っているかという江戸時代から掘り続けた用水路、二尺五尺の掘った穴を使って用水路をしているところは比較的水田として残っている。一方で汲み上げ式にして、機械に頼ったようなところは維持管理費用がかかりすぎて過疎化が

進んで使われなくなっている。屋久島の山奥に関しては覚悟を決めて、やるしかない時代にきているのではと思う。お金を出せばいいのだが、本当にお金を恒常的に出せるかどうか考える時期にきているのかと思う。その際に、白と黒の案が当然出てきて、それに併せて灰色にしようというやり方はこの場合は望ましくない。白い橋を作るのがいいのか黒い橋を作るという議論の際に、中間の案として灰色の橋を作るのはありえないのと同じで、トイレの話や施設整備の話は、やはりそろそろどこかで覚悟を決めないといけない。私のこれまで見てきた経験から言うと、科学技術だけでとても対応できる山ではないというのが正直な感想。だからこそ政治性が出てくるのではないかなと思うが、その中ではやはりローテクでできる限りのことをやっていくという案が結果的には長期的にはローコストにもつながるというのは私の意見である。もちろん現在のトイレをすぐ壊せということではなく、新設はしないとかそれが使えなくなったら必然的に携帯トイレに移行するという覚悟を決めるくらいがよいのではないか。屋久島の場合はガイドさんがいらっしゃるので、ガイドさんがきちんと観光客、登山客に説明することによって、それが価値の転化につながるのではないか。縄文杉ルートだから無理なのではなく、むしろ日帰りの方がやりやすい点もある。実際に携帯トイレを使ってみて、これまで早池峰や岩手山も登ったが、日帰りだと数も少なくてやりやすい印象があるが、そういう価値の転化をする時期にきているのかなというのが個人的には思う。もちろん色々な意見があるのも承知している。自分の意見を押し付けるつもりはないが、自分は信念をもって発言している。

土屋 座長：座長としては灰色を目指すところもあるが、少し意見が分かれるところではあるので、方向性をしっかり出すというのは同時に大事だと思っている。

屋久島観光協会 伊熊ガイド部会副部長(部会長代理)：トイレについては、羽井佐さん、吉田さんの発言を聞いていて、携帯トイレに傾向している発言があったのでこの会のなぐれを、そちらへもっていきたいのかと裏の考えを疑った。「今後の携帯トイレ導入方針及び導入概要」についての書類を田中さんに確認したが、現状はこのとおりの利用がされている。柴崎さんの発言では、ガイドがいるからという話もあったが、縄文杉ルートでいえば、一昨年にガイドの利用状況を登山口でカウントしたところガイド利用は51%だった、半分は一般の方々になる。全てのお客さんにマナー・モラルを守ってもらえる環境にもっていけるのかということ、疑問なところはある。0か100の話ではなく上手に併用していくことを考えることが大事だと思う。

次に、登山道のことについては、田中さんが翁岳の鞍部の深い掘れの修繕にはお金がかかるという話だった。事前に察知することはできるのか？できるのであればやるべきである。ルートに関しては、縄文ルートだと木道が整備されており、歩きやすいし、侵食も抑えられている。設置されていたのは平成9年であり、出来上がってから約20年が経過している。木造物なので、痛んだ場所はガイドが軽微な補修を請負っているが、軽微を越える補修ではないと対応できない場所も多々ある。施設は設置すると、壊れるが管理者である鹿児島県は建屋や歩道に関してどう考えているのか聞きたい。ここの施設等管理者がすべきことについて、P2には「自ら設置した施設については、まず必要な整備や維持管理の予算を確保する努力をすべきではないか」と書いてあるが、当たり前のことが現状できていないことがある。

協力金については集金データを把握している。それをつかって整備すればいいのではなくて、管理するのは誰なのか、そこはしっかりと考えてもらいたい。何に対しても協力金を使うものではないと思う。

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：浸食の事前察知だが、翁岳の鞍部は昨年度行った時には落差1mだったと思う。GWのあと7月終わりには1.2mになった。台風5号の後には2mをこえているくらいになった。予想をはるかに超えて浸食は進んだ。

ある程度落差があるところは、川でいうと落ち込みになるので、その滝壺の部分の河川工学的の言葉でいうと河床の部分がある程度、石を敷くとかの対策をしなければ深掘れし、縦断方向に浸食が進んでいくことが河川の考えかた、登山道整備の対策の取り組みでわかってきている。そういったことがあるので、そういう観点で日頃からチェックしながら、「ここはなにもしなかったら浸食が進んでいくかもしれない」ということなら石を落ち込み部分に事前に敷いて、侵食をくいとめるようにすることができるのではないかな。側方の部分は、法面の法尻にころころと落ちてくる土砂を受け止めることによって、法面が安定してくる。非常に地道でこまめな手入れになるが、そういったことで察知をしたら、事前に少し手を打つことはできるかと思う。翁岳の鞍部の浸食までになってしまうと、日ごろのメンテのレベルではない。それは大株歩道の老朽化問題も同じだと思う。そういった意味ではある程度は事前に察知できるのではないかな。冒頭に吉田委員が発言した幸屋火砕流、アカホヤ火山灰が浸食されてでてくると、焼野三叉路から先のように季節が変わるごとに浸食が進んでいってしまう。そういった見方もできると思う。

鹿児島県自然保護課 羽井佐課長：着任間もないこともあり、裏の意図については全くない。携帯トイレについては、何故使用率が高まらないのか理由があったと思う。個人的には携帯トイレを携行してみて、泊りがけで使用率が高まらないのであれば、その理由としては泊りがけで行くときの登山者の喜びの一つとして、歩けば歩くほど食べたりして荷物が軽くなってくることがあると思うが、100%携帯トイレを使うならば、ほとんど荷物の重さが変わらないことが考えられる。1泊2日程度だと体力があるので問題ないが、長丁場の利用にあたっては理由になるかもしれない。個人的には多様な利用の形態を維持するならば施設についても多様でないといけないと思う。個人的には多様性の重要性も認識している。

吉田 委員：携帯トイレだけ推進すると言っているつもりはない。今後議論するゾーニングの中で、どういった方向がふさわしいのか検討してふさわしい方向にもっていくことが必要だと思う。山岳部利用ではない人達が泊まる山小屋のトイレには、今のような汲み取り式トイレではなくて、もう少し明るさ・匂いの問題を改善する事はありあえるのではないかな。また、覚悟をもって山に入るところは携帯トイレ中心となる等の議論はしてもいいと思う。オーストラリア、ニュージーランドの国立公園のように質の高い自然体験を提供しているところが、今のような日本のこの屋久島の汲み取り式トイレの状況をレンジャーがみたら、「なんだこれは」と言われるに違いない。質の高い自然体験を提供するにはふさわしくない状況になっていると思う。これはきちんと議論して、どのようにしていくのかを決めたほうがいい。バイオトイレだけでなく、場合によってはパッケージにしてヘリで運んだ方が安いのではないかな、といういろんな方法がある。今のような汲み取り式トイレの状況を「仕方ない」と言っているのは時代遅れで「質の高い自然体験の提供」を議論している場にはなじまないと思って発言した。

九州地方環境事務所 加藤国立公園課課長：実際に歩いた感想も含めて発言する。私自身は登山者として

の経験は少ない方で、今回は現地視察に行かせていただいた。携帯トイレ利用は初めてで不安があったため、事前に保護官事務所の女性のアクティブレンジャーに聞いたりして情報を得た。鹿之沢小屋に泊まったときには携帯トイレブースはテント型で、小屋のすぐ横にあり、夕飯の支度をしているすぐ前なので、意識的な抵抗があって、始めは汲み取り式トイレを使った。汲み取り式トイレは、匂いがあり、暗く、登山者はここまできてこのような汲み取り式トイレしかないのかと感じるかもしれない。翌日の途中で、翁岳鞍部の携帯トイレブースを使った。洋式で座れて、中に棚があって落ち着いて使えるということもあり、快適に使えた。こういった場所で携帯トイレを経験できたのでよかった。事前に携帯トイレ利用についての情報がないのと、あるのでは大分変わってくるので、ハード面とソフト面の両輪が重要かと思う。利用者が登山口から入って出てくるまでが一連の体験だと思うのだが、全てのことを含めて屋久島でどういう体験できたかというのが非常に大きなものになる。全体を考えながらこの問題に対処するというのが大切だと思った。

登山道についても、人が歩くだけでなく、気象条件や斜面の向きの違い、標高差でも、ここではこのように浸食することを聞くだけでも色々な屋久島の自然環境をさらに知ることにもつながるので、古賀さんに案内いただいたことでレクチャーを受けながら山に入ることの大事さを改めて感じた。自分の力量からいっても体力的な不安も含めて、厳しい所も一步一步教えていただければ自分でも通ることができる。施設整備についても、自然の力に抗えない部分も、手作りの補修で通しやすくしてもらっているところなどを感じることができた。そういったことをガイドさんを伴って入った方でも、そうでない方でも感じられる奥山ゾーンになることが屋久島の大切な役割の一つだと思った。屋久島に来たい人が、どんな体験をしてどんな感想を持ったのか、繰り返し来る人は何を求めているのか、利用者の意識など、過去のデータで共有した上で話しを深めていくのかなどやっていける事をさぐっていければいいのではないかな。

土屋 座長：最後のところだが、利用者側の意識面でどうなっているかというのはこの議論のベースになる部分である。それがガイドや様々な情報発信や環境教育的な面で、変わっていくことも事実なのだが、その辺のところは柴崎さんのこれまでの調査や、他の機関も含めての意識面の調査はどうか。

柴崎 委員：屋久島のアンケート調査をとって見ていると、やはりお客さんの環境意識がすごく高く、原生的な空間を求めてきている。屋久島であるからこそ来た。原生的な空間もあるし、それを守りたいという意識を持ったお客さんはかなり多いと思う。そこで少し分からないのが、観光客の環境の意識の高さをさらに高めるような工夫がなされているのかはわからない。個人的にはそれをやることで、屋久島の価値が高まると思う。屋久島に来る時点で、環境意識の高い人が入ってきていることは間違いない。何を求めているかは、原生的自然や縄文杉を見にきたという観光客が多いということが研究でよく言われている。

土屋 座長：ある程度、意識面での調査はやられていると考えていいのかな。

柴崎 委員：一部だが調査している。

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：平成 26、27 年には柴崎委員のアドバイスをいただいて、港や空港で利用者の動向調査をした。今、その概要については話す事はできないが、次回にはその時の結果を資料として出したい。それなりの数のサンプル数がとれていたはず。

土屋 座長：調査結果を期待したいと思う。

屋久島山岳ガイド連盟 古賀代表：淀川登山口で協力金の徴収を手伝っており、そこでの登山者の感想、としては、日帰りでも 1000 円、泊まりでも 2000 円いただくが、最低限の整備ができていないと苦言を言われている。これは仕方のないことだと思う。携帯トイレブースに閉じ込められたり、石塚小屋のトイレがドアを押さえながらでないと扉が閉まらない、石塚小屋、高塚小屋、鹿之沢小屋、淀川小屋は雨漏りしており、最低限の整備が必要。それから先のもっといいものをここでは考えてもらいたい。まず最低限の整備をしてもらいたいというのが登山者の方の意見で出ていた。

土屋 座長：これも私の感想になるが、施設ごとで管理責任者、設置者が違うので、最低限の情報交換やすり合わせも重要になってくると思う。その中で、それぞれの施設の、なるべく改善の方向で考える意識醸成が必要。この場というより、作業部会が必要だとも思う。

吉田 委員：古賀さんから大事な提起があったが、施設は管理者が予算をつけて維持管理していくのが原則だが、最低限のところできていない状況にある。そんな中で協力金をいただいているというところが非常に辛いと思う。これを続けていって、最低限の修理ができていかなかったら、そのお金は何に使っているのか？その言い訳として、縦割りになっているからで使えないといっても納得してもらえないと思う。これは管理者のそれぞれの主体が、早急にやってもらった上でそれでもだめだったら協力金を使ってでも、他の主体の所につかっても緊急にやらないとならない。お金を払ったのに、最低限の事もやってくれないと投書が新聞に載ったら、この保全協力金制度自体が批判を浴びてだめになってしまう危機感を持っている。

土屋 座長：非常にクリティカルな部分の指摘があった。施設の整備水準やメンテナンスの問題、ルートの取り扱いについては、次に議論するところにも入っている。

鹿児島県環境林務部 古川主事：利用者へのサービスということで、ここの論点からは外れるかと思うが発言する。昨日は進行が遅れており、淀川登山口着が 19 時前になった。帰りのタクシーや宿への連絡が必要だったため、携帯電話で連絡した。花之江河手前では電話が通じたが、淀川登山口では通じなくて、そこから 3 分くらい山に入るところで携帯電話がつながった。そこには案内はなかったが、最低限知りたい情報だった。問題はあってもいいかもしれないが、それがなんらかの形で示せばいいと思った。

土屋 座長：安全と利用体験の質では、携帯電話の利用は重要。これまでも遭難の時には携帯電話の情報が必要だった。自然体験の質を考える時に、携帯電話の会話が聞こえることが自然体験の質を下げるといふ議論もあるが、兼ね合いのところでの論点の指摘だった。

■ ROS手法を用いたゾーニングの取り組み事例について

◇ 参考資料1について

【資料説明】

柴崎 委員：山岳レクリエーション管理研究会が出版した「ROS 新たな自然公園の管理にむけて」という参考資料1を説明する。ROS (Recreation Opportunity Spectrum) という聞きなれない言葉だが、簡単に骨子だけを説明する。

国立公園など利用する人には様々な利用者がいて、今日の話でもあったが、ハードな登山、トレッキング、里や滝や川を眺める、バリアフリーが必要な方もいる。多様な利用者が、多様なレクリエーションを体験しようとしていることを前提に、より多く満足させられるかという考え方に基づいて導き出されたものがROSである。実際に、レクリエーションの場でも原生的な自然がそのまま残っていて、手が加わっていないところから、人工的で様々な施設が沢山あるというような観光施設もある。こういった関係をどうマッチングさせるかがROSの考え方である。わかりやすくいうと、現状とあるべき姿で話しが全然違う。あるべき姿でいうならば、ある場所について非常に原生的な体験で満足してもらいたい場所であれば、そういった自然環境、施設、管理を行う。具体的には、できるかぎり手は付けずに、施設も少なくして、管理は粗放的に行う。放置するような場合もある。一方でそうではなくて、多くの人々に来てもらいたい、多くの観光客、バリアフリーの人にも来てもらいたい場所では人工物を作って(施設)楽しんでもらったりとか、見回りする時も管理したり、ゴミ捨て場を設置したりとか、都市に近い空間を提供するというような、メリハリのついた観光施設、国立公園を含む保護地域を作りだしていこうという考え方。それに基づいてゾーニング、地域の指定を行っていくというものである。メリハリのついたゾーニングということで、例えば3Pにある「ROSに基づいた現状利用図と管理目標図」があるが、誤解されがちなのは、この現状利用図を作って、現状が是として話を進めて行けばいいと勘違いをするが、そうではなくて、自然環境がどうか、施設、管理の水準がどうかという3つの基準にもとづいて、分析をしたのが、現状利用図である。しかし、そうではなくてその先のゴール、ある場所ではどういった体験をしてもらいたいかということ議論した上で、それに近づけるにはどうしたらいいかを考えるのがROSで一番大事な部分になっていく。

イメージがわからないかと思うので、大雪山の事例をみると、P5.6には「大雪山 ROS 管理目標イメージ図」には5つに区分した場合、現状を踏まえてどうあるべきかというゾーニングでは、原生区域、自然区域、準自然区域、準整備区域、整備区域とわかれている。原生区域に近づく程、原生的な体験ができる場所で、孤独というのはあまり多くの人と出会わない事。場合によっては、迷いやすさもここに入ったりする可能性もある。一方で整備区域に近づくほど安全が提供されて、快適、トイレなども整備されて、便利というようにいろいろなアクティビティもできるし、都会の施設と同じようなサービスが提供されるということである。こういった形で、自然環境、施設、管理水準という3つのことについて、原生区域に近づくほど、自然な状態に近い管理を行ったり、自然環境にも手をつけない、施設も最低限しか作らない。一方で整備区域に近いほど、様々な人工物を設置して安全性を確保する。テントを張る場所だったり、ビジターセンターや水飲み場など様々な施設を用意して、道標、解説板を用意して、観光客やバリアフリーを必要とする方も楽しめる区間を作っていくというようなゾーニングになる。こういったものが屋久島にも必要ではないかということで紹介した。ただ、ROSという考え方はもともと、

1970年代にアメリカの国有林を運営する際にどうしたらいいのかということで出てきた考え方。軸はどちらかという、原生性に特化している部分があるので、人々とのかかわりが深くある、聖地のある屋久島では、例えば原生的な度合だけでなく、文化的な重要性、聖地や森林軌道、林業とのかかわりのある場所であるとか、もう1つの軸も含めてROSを考える。一部の地域では、先住民の文化を守るためにCOS (Cultural Opportunity Spectrum) という文化的な側面での段階分けをしているところもある。このため、現制度に基づくROSと文化的な手法であるCOSと組み合わせながら整備を考えていったらいいのではないかと。

土屋 座長: 補足はほとんどないが、P5,P6のイメージ図のトイレのところを見ると、左から右にかけて、一番右は水洗トイレ、一番左から二番目は携帯トイレのブース、真ん中が汲み取り式のトイレ、その右隣はもう少し施設整備された汲み取り式トイレになっている。グラデーションをつけての整備の時には、現状は縦の通りにはなっていないわけだが、現状を知って、縦の系列が全部同じ整備水準になるように、それぞれの区域に分けて整備していくというのが、ROSの特徴である。

それと同時に、重要なのは屋久島なりのROSをやっていいということ。どこかにやらなければいけない決まりがあるのではなく、それぞれの地域や場所に応じて、5区分、3区分、10区分でもよくて、その中の区分の仕方も、原生によったものでも、利用によったものでもいい。それは、合意に基づいてそれぞれの地域でやってもらいたいというのがこれの趣旨である。そのところは誤解の無いようにしてもらいたい。

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官: 参考資料1のP3.4に現状利用図と管理目標部(試案)がある。今私達がビジョンに関する検討とこれの関連とはなにかということ、この左側の現状利用図と、右側の管理目標部(試案)とあるが、この管理目標図を作るにあたって、何かしらよるべき考え方がないとこれを作ることが難しいので、この真ん中の余白にはビジョンやあるべき姿の考え方があって、そのフィルターを通して、右側ができてくると考えている。このため、足掛け5年の検討で、最初にビジョンを検討することはそういった意味があると考えている。

◇ 参考資料2について

【資料説明】

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官: これは大雪山の登山道の管理水準の2015年の改訂版で、1Pでは、最初の数行に目的が記載してある。登山道を適切に保全管理(整備、維持管理)するためという目的で、この整備水準を定めている。もう1つは、4行目に登山者自身が自己責任のもとで登山や自然環境に配慮した行動を行って欲しいということがあって、整備水準と一緒に登山の心得というものが作られている。最初は平成18年に作られていて、いろいろな状況の変化があって、平成27年に改訂している。2Pには大雪山グレードが書いてあるが、ランク分けは2つに分かれていて、下の方の図には利用体験ランクというものと、保全対策ランク(施設整備、植生保全の必要性)のそれぞれのランクごとに利用体験ランクの方は5段階で設定、保全対策ランクは4段階に設定されている。こういったかたちで大雪山はグレーディングをしている。

2P図の中には「大雪山国立公園における登山道整備技術指針への照らし合わせ」とあるが、大雪山も

登山道問題で昔から課題として取り組んでいるが、これを考える時には、屋久島の登山道整備の仕方、昔ながらの楠川歩道とかの石積みや龍神杉の歩道も参考にしていたと記憶している。その時点では、大雪山よりも屋久島のほうが少し課題の対応は先に進んでいたと思う。その後の展開は大雪山と屋久島では異なってきた。

3Pには「1. 大雪山グレード(利用体験ランク)」では、3段落目の2行目辺りに「管理者は大雪山グレードに応じた登山道に応じた保全修復や維持管理を行い、登山道周辺の自然環境及び奥深い雰囲気を持続的保全と大雪山らしい登山体験の提供を図ります」なんのためにこれを定めるのかが書いてある。その下には下から4行目に「この区分により、登山者が自己責任で行動判断を行う時の目安を定め、力量に応じた登山を推奨します」というもう1つの目的が書かれている。

4Pには、利用体験ランクの段階設定をするために評価項目が左にあるが、大雪山ではこういった評価項目を使って5段階でグレーディングしたと書いてある。大雪山は冬山登山もあるが、夏山シーズンを対象にやっていると書いてある。

13Pには、「2. 登山道の保全対策ランク」では2段落目には、「登山道を適切に管理するためには、登山者に提供する登山体験の程度等を定めた「大雪山グレード」を保全管理に携わる山岳関係者の間で共有し、登山道の区間ごとの管理目標について共通の認識をもつ」といったことが書いてある。何のためにつくるのかが書いてある。

14Pには、保全対策ランクをどういった評価項目をつかって、何段階に定めたのか記載している。それ以外のところは、具体的に考え方にもとづいて、この区間はこういった色に塗り分けたところまで書いてある。

P23には、野営指定地や避難小屋にもこの改訂版では適用したということである。指定野営地や避難小屋のグレーディングのことが同じ形で説明されている。

これはあくまでも大雪山での例であって、大雪山では利用体験ランクと保全対策ランクというのは、施設の整備と維持管理に特化したような形になっている気がするが、決してROSの考え方は施設整備と維持管理に特化したようなものではなくて、多様な利用体験を提供するための一つの考え方、アプローチの仕方であるので、ソフト面、極端にいったら利用者数制限とかそういったものを排除するものではないし、大雪山でも必要であれば、ソフト面での対策も込みでやったのだと思う。そこを誤解して、施設整備の話だとして議論をするのはいいことではなくて、利用者数制限を前提として考えているわけではないが、議論をスタートするにあたっては、施設整備だけでなく、そういったソフト面(情報提供なども込みで)認識をしてもらったうえで議論していく必要があると思うので、あえて付け加えた。

土屋 座長：少し付け加えるが、P5には大雪山グレードがある。これは各登山道のルートごとにどれにあたるのかという表示をつけようとしている。この図を見てもグレード1は家族連れ、グレード5はもう少し屈強な人がかなりの傾斜を登っているような図になっている。わかりやすくしているのと同時に、文章の方も大事である。グレード5には「登山者自らのリスク管理が必須とされ、極めて高度な行動判断を要求される登山ルート」と明記されている。このことが非常に重要であり、つまりリスク管理もこの中に必ず入れている。自己責任をグレード5、グレード4、グレード3まで書いてある。グレード1・グレード2にはそこまで求めないというように、メリハリをつけていることが重要。

もう一点は、この事業は環境省でやっているが、国有林もROSのパンフレットが出た2005年の4月

に林野庁長官通達が出ていて、この通達「レクリエーションの森の整備について」には ROS の考え方が入っている。通達まで出て研修会も行なったのだが、実施までいっていない。国有林でもレク森に限っては、一つの考え方としては、認められたところである。

今の事は一つの考え方の提案に過ぎないが、先程からのルートの取り扱い方、整備水準のあり方、リスク管理のあり方について、ご意見をお願いしたい。

日下田オブザーバー：今回の ROS 紹介は、具体的な管理手法を求めらるうえで極めて有効だと思った。

それはそれとして、前提となる屋久島の価値認識を、表現の形も含めて共有することが欠かせぬ要件と、あらためて思った。様々な意見の要点は「まるごと」と表現されるように自然の多様性を踏まえつつ、同時に存在する人々の行為をも重ねて、同軸的に捉えることにある。

国立公園あるいは世界遺産屋久島の価値が挙げられる場合、屋久杉の自然林と垂直分布、などなどのように、とかく箇条的表現になりがちで、一般にもそのように受け止められることが多いようである。しかしながら、実際には多様な自然の相互関係や人間行為と重層化して存在している。屋久島の特徴をなす要素や、その価値は並列的に存在するのではなく、循環的体系をなしているという認識がビジョン検討の前提として必要と思える。古い話になるが、環境文化村構想で「共生と循環」という言葉が導き出されたことを思い出す。屋久島の価値を表現するうえでも、循環的体系を踏まえておくことが重要と思える。島であるが故に、水循環の例のようにクローズドサーキットに近い理解も可能であり、屋久島フィールドの特徴といえる。

他にも多くの場面で項目並べでなく、繋がりあった巡りとして説得性にすぐれた特性を有している。海と山をつなぐ岳参り、屋久杉の伐採と森林再生、地名“永田”が示す山から海への地理的体系などを挙げることができる。屋久島全体を循環的構造体ととらえるべきではないだろうか。

前回の会議で観光協会長さんがストーリー性の重要性を話していたが、PR だけではなく、循環的繋がりあいとして屋久島を把握し、表現するうえでも有効であると思う。このような認識が、管理手法の意味や説得性を高めることになるのではないか。また、登山者を含む来島者に対しても屋久島の自然に関与する当事者として、維持的管理の担い手と自覚してもらおう手がかりにもなりそうに思える。

土屋 座長：今日の議論のベースになる部分を確認する発言だった。

柴崎 委員：この ROS の考え方がアメリカなどで導入され、日本でも考え方を参考にしようとしているのだが、気をつけることとしては日本では ROS 的な発想で管理されてこなくて、大人数での利用に供する形で観光開発、国立公園、世界遺産地域の施設整備が行われてきた傾向がある。その結果、保護地域の一番核心の部分だからこそ、施設整備がされている現状が起きている。それゆえに過剰利用の問題がある。そういった不整合の状態を変えていく、1つの考え方として ROS が参考になるのではないかということで紹介した。ROS のままに厳密にやると、いろいろ問題がでてくるが、その方向に近づけていこうという発想は大事である。

宮之浦岳参り伝承会 中川会長：まずはこの参考資料 1 はすごくいいなと思いました。これをもっと早く科学委員会で出してもらいたかった。

山岳利用の問題は、トイレの事、登山道、山小屋、だいたいこの3つである。特にトイレについては難しい問題、大きなテーマなので、専門部会が必要だと思う。登山道や山小屋に関してもそうだと思う。屋久島学ソサエティでもガイドさん達が中心となって、トイレ問題を解決したいということで、ずいぶん動いていた。いい成果を挙げられたと思う。この検討会ではビジョンについての検討はできても、技術的、専門的なことは難しいと思う。

今日のテーマにはそぐわないかもしれないが、山岳の利用のあり方、山の使い方、関わり方の問題として言っておきたいことがある。先日、NHKの巨大杉の番組があった。インターネット上でも出ている噂を聞いた。あれを探しにいこうとか、いろんなことがおきていると聞いている。あれは学術調査などではなく、単なる宝探しだ。誰が頼んで、あんな事をしたのか。関わっていたガイドさん達を責める気はないが、島の人にはあんな事を望んではいない。NHKはふんだなお金を使ってなんてことをやってくれたのだという感想を持った。特にえげつないのは、屋久島をスキャンしてまる裸にして、人の家をレーザーでのぞいているような、あるいはあぶり出すようなやり方で、スギが呼んでいるわけでもないのに、押しかけて行って、「あった」と。発見は出会いだと思う。そういったこと（畏敬の念のようなもの）が感じられない。土足で踏み込んで行って見つけ出した。あれ以上の事はやってほしくない。山に対する捉え方が違うという認識でいる。何らかの許可を得て撮影はしていると思うが、ちょっと違うのではないかと感じたので、今日はここで皆さんと認識共有してほしいと思った。

柴崎 委員：中川さんの意見に賛成するところがある。初めて屋久島に入ったときには、太鼓岩への道もできていなくて地元の人だけが知っている秘密の場所だった。だんだんと知られていって、ガイドの利用もされて、人数も増えて行って、結果的に施設も整備されていった。あれを繰り返すと、どこかでそれを覚悟して止めて行かないと、際限なくやってしまうとリスクも高まる。ガイドさんがやっているとは言わないが、観光利用を進めていってしまうと、太鼓岩だけでなく、高盤岳も今では案内されている。石塚山も行く人が増えている。だんだん屋久島の知られてなかった部分が、どんどん知られていく方向になっていく。それは、屋久島の魅力を伝えることなのか、むしろ消費して使い捨てしているのではないかと思う。どこかで、情報の制限が必要だと個人的には思う。

屋久島森林管理署 川畑署長：今の中川さんの発言について情報提供させてもらう。昨年12月から本年6月にかけて、森林生態系保全センターに入林申請が計5回に分けて出されていた。企画書では「屋久島の自然の撮影のため」ということだった。一部には縄文杉以外にもスポットをあてるという企画だった。私共としては、学術研究という観点から許可した。入林の際に得た情報、データ等は提供してもらい、一般公開は慎むことと条件付けした。番組報道後には屋久島保全センターからNHK福岡放送局に対して、位置データ情報をしっかりと管理するように伝えた。NHKと関わった方々は守秘義務を負っているので、それも徹底するよう要請をしている。

土屋 座長：一番最近の全国に情報が発信された番組に関しての説明だった。検討会では、これ以上深く扱うことは適当ではないと考えている。ただし、意見や情報提供はありがたかった。

■ 第3回検討会について

◇ 参考資料4について

【資料説明】

事務局 日本森林技術協会(高橋)：第3回検討会でも現地視察を行う。場所は、利用の集中する登山道として、11/4に、荒川登山口→縄文杉・高塚小屋→荒川登山口(日帰り)、11/5に白谷雲水峡→太鼓岩→白谷雲水峡(日帰り)を視察予定としている。第2回、第3回検討会での現地視察を比較してルート・コースごとのランク分けを含めた適正利用に関するビジョン検討に資する情報収集をしたいと考えていることを説明。

土屋 座長：今後は一番利用の密なところ、体験の少ない方でもできる場所としてレク森のあり方についても、議論したいと思う。現地視察では国有林の方にも協力いただく事になる。今日も非常に良い議論ができた。

屋久島観光協会 伊熊ガイド部会副部長(部会長代理)：次の現地視察は、「山の神の日」なのだが、文化などを大事にしようとしている検討会で、「山の神の日」をぞんざいにあつかってしまうと感じてしまうのだが、委員の方々の考えかたを教えてください。

土屋 座長：旧暦が9月26日だが、新暦に移行したときに、9月に行われるようになった場合が多い。今回は実際の旧暦を正確に反映すると11月4日になるということだが、比較的新暦の方の9月でやられているとお聞きして、仕方ないかと思ったところである。それが間違っていたら申し訳ないところだが、決して、無視しているわけではない。

屋久島観光協会 伊熊ガイド部会副部長(部会長代理)：分かりました。

土屋 座長：第3回検討会以降も、引き続き議論を進めたいと思う。